

第242回
2019年5月16日(木)

中村 美知夫

京都大学理学研究科・准教授



『サル学』と アフリカ研究の黎明期

日本の霊長類研究グループは、10年にわたるニホンザル研究成果を掲げて、1958年にアフリカへと進出した。こうした流れは、その後の日本人研究者によるアフリカ研究の発展とも関連が深い。私の調査地であるタンザニア、マハレの事例を中心に、「サル学」とアフリカ研究との関連について概説する。



京都大学稲盛財団記念館3階中会議室にて
15時〜17時

アフリカ地域研究会

京都大学アフリカ地域研究資料センター

予約不要、参加無料



アフリカの広大な熱帯林には、マルミミソウやゴリラをはじめとする多様な哺乳類が生息する。しかし熱帯林はアクセスの困難さに加えて、密な植生が視界やラジオテレメトリ電波を遮ってしまうため、彼らの生態研究は遅れている。自動撮影カメラなどを用いた映像記録がその突破口となるかもしれない。本発表では、ガボンとカメルーンで撮影した映像データから解る哺乳類の行動や生態を紹介し、映像による動物研究の可能性と限界を考察する。

アフリカ熱帯林の哺乳類 を映像で解き明かす

本郷 峻

京都大学アフリカ地域研究資料センター
特定研究員



第243回

2019年6月20日(木)

第244回
2019年7月18日(木)

杉山 祐子

弘前大学人文社会科学部・教授



おカネがつなぐ・縁がつなぐ

現代アフリカ農村における現金獲得活動と新たな「共同」の楽しみ

現代アフリカの農村生活に現金は欠かせない存在となり、実に多様な現金獲得の活動が生みだされている。興味深いのは、それらの多くが十分な資源をもたない人びとによる小規模な活動であり、その連鎖が新しい社会関係やモノ・情報のアクセスポイントとなって、生計に新たな選択肢を加えていることである。本報告では女性たちの生業活動に焦点を当て、人びとが現金獲得活動を展開しながら新たな「共同」を生みだす姿を検討する。

